ニュー・ハーモニー平等村におけるR.オウエン

——労働教育の問題を中心として——

(教育史・教育哲学科研究室)
岩　本　俊　郎

R. Owen in the New Harmony Community of Equality.

Toshirou Iwamoto

Up to this time, the educational ideas of R. Owen (1771—1858) have been studied from the various points of view, and have been highly appreciated. However, theory and practice of R. Owen concerning the labour education have not been satisfactorily clarified by those preceeding studies. Their opinions might be reduced to the following three kinds. (1) R. Owen united labour with education in the true sense of the words. (2) It was not until the issue of the 'Report to Lanak' (1821) that Owen clarified his ideas about the combination of labour and education. (3) Owen did neither recognize nor insist the importance of labour in education.

In this thesis, I attempted to clarify his educational activities in the New Harmony of Equality, because, as has often been pointed out, his theory which was represented in his 'Report to Lanark' was put into practice in New Harmony, and found that not R. Owen himself but Maclure a pestalozzian who considered school labour as a means of self-support of the school practiced it.

Maclure's opinion could not harmonize with Owen's social, humanistic and philanthropic standpoint. Here we can find a characteristic of Owen's educational ideas and at the same time their limitations.

目　次

I　はじめに
II　ニュー・ハーモニー平等村の建設
　1.　準備社会の建設
　2.　平等村の建設
III　ニュー・ハーモニー平等村の教育
　1.　準備社会期の教育
　2.　共産主義憲法下の教育
IV　結　語

I　はじめに

R・オウエン (Robert Owen 1771～1858) に対する関心の高揚は戦後の日本の教育学界におけるひとつの注目すべき事実である[1]。しかもその研究視点の多様性のみならず，そこに一様ならざる評価が行われていることも注目してよい事実だと思う。もちろん，近代教育史上の重要な位置をオウエンに認めようとする人々の間では，例えばその幼児教育，集団主義教育，教育の機会均等などについての主張において彼を重視しようとすることに大きな異論がある訳ではない。しかしながら従来の研究において，彼の教育思想の中核とも言うべき生産労働と教育の結合の問題に関する理解は必ずしも統一的であるとは考えられない。

例えば，オウエンはニュー・ラナークの「性格形成学院」で生産労働と本質的に結合した教育を行ったことを認めようとする主張[2]，あるいはまたこの問題についてのオウエンの理論的自覚は「性格形成学院」の時期には

必ずしもまだ明確ではなく，ニュー・ラナークの「統治」以降ようやく深化するに至ったとみるもの[3]，またこれらとは全く反対に当時の工場労働が単純な，しかも苦役としての機械的労働にすぎなかったが故にオウエンはその労働に対して何ら教育的意義を認めようとしなかったと主張するもの[4]等，その間の認識にはかなりの相違がある。

このことは，生産労働と教育との結合，またはその関係という問題そのものが実は多様な解釈を導くような要素をもっている上に，オウエン自身の思想と実践の発展がこの問題をめぐってかなりの起伏をもっている等の事情によるものと考えられるのである。

そのことについては，すでに戦前オウエンの生涯を彼の思想的発展の見地から5つに時期を区分し，その各時期の著作に詳細な検討を加えた五島茂氏[5]が『ニュー・ラナーク住民への講演』(An Address to the Inhabitants of New Lanark 1816)に関して次のような指摘をしている。「われわれは『教育と生産労働の本質的結合』こそOwenism教育の基本的傾向だと見る。此意味でOwenismは当時の独逸に行はれていた汎愛学校とも又現代の最も進んだ保育学校とも異ったプロレタリア的教育の方法の先駆型の発芽と見るのである。但し之は本書では全面をあらはしてはいない。」[6]（傍点岩本）

氏のこのような指摘はオウエンの生産労働と教育の結合についての理論と実践の内実を正しく究明するうえで，われわれに極めて重要な示唆を与えている。事実ニュー・ラナーク時代のオウエンは，自らの工場における児童労働の廃止[7]や，工場法提案のための諸活動[8]に端的に示されているように，児童をあの過酷な工場労働から引き離し，基礎的な学習に専念させるべきことを主張したのである。彼が児童労働の持つ教育的意義を積極的に明かにしようとしたのは，F.エンゲルスをして「完全な共産主義的社会制度に到達するまでの過渡的方策」[9]と評せしめた協同組合設立のための理論を展開した『ラナーク州への報告』(Reports to the County of Lanark 1821) の公刊以降のことであった。すなわち彼は搾取の消滅した共産主義的ユートピアを構想することによって始めて児童が本質的に生産労働に従事し，それを通じて「立派な習慣，見識，行儀，性質を身につけた行動力と知識にみちた労働者階級」[10]へと成長しうることを明らかにすることができたのである。

そのような意味においてこの『報告』は彼の労働教育思想の発展のうえでもその「思想的成熟の最頂点を示すもの」[11] と言い得るのである。しかし彼の活動はこの『報告』によって終止符が打たれたのではなく，却ってこの『報告』に盛られた理論がその後のニュー・ハーモニー平等村の経営を通じていわば実験に移されようとしたことに注目しなければならないのである。すなわちオウエンの労働教育思想をいっそう正確に把握し，教育思想家としての彼の全体像を明かにするためには，ニュー・ハーモニーにおけるオウエンの実践についての分析を欠くことができないであろう。それによってまた従来のオウエン研究が依拠してきたと思われるG.D.コールの指摘[12]をも越えることもできると思うのである。

II　ニュー・ハーモニー平等村の建設

1.　準備社会の建設

社会改良のメッカとして英国のみならずヨーロッパ各国名士の訪問の絶えることのなかったニュー・ラナークは，オウエンによるあの有名な宗教否定の大演説[13]（1817）を契機にして，合資者の非協力，そしてまたオウエン主義信奉者の離反等によってかつての如き円滑な運営は次第に困難になって行った[14]。しかもオウエンはニュー・ラナークにおけるそのような危機にも拘らず，ますます既存社会体制への徹底的批判を進行させ，ついに1821年には共産主義的ユートピアとも言うべき『ラナーク州への報告』を公刊したのである。この共産主義的構想が彼の工場法案すら拒否した支階級に迎え入れられるものではなかったことは言うまでもないが，それはまた混乱を深めていた彼のニュー・ラナークにおいて実践に移すことも不可能であった。従って彼は一方において彼の究極的理想社会である共産主義的ユートピアの構想の正当性を大衆に広く訴えるとともに，他方において新たな実験の地をさがし求めたのである。不動産業者 R.フラワーがオウエンにハーモニー村買収の商談を持ちこんだのはまさにこのような時においてであった。

1824年4月にR.フラワーが販売の委託を受けたハーモニー村はドイツ人 G.ラップ (George Rapp) が原始キリスト教的信仰を掲げ，敬虔なドイツキリスト教徒を率いて建設した財産共有の協同村であった[15]。この協同村は製粉工場，なめし皮工場，ぶどう園，染色工場等を備えた自給自足社会であり，開拓が進むにつれて豊になって行ったのであるが，それと同時に開拓初期のような住民の気魄が薄れてきたことも事実であった[16]。ハーモニー協同村の売却は，このような協同村の崩壊を恐れた指導者ラップが新たな開拓地を求めるためであった。

R.フラワーがなぜスコットランドのオウエンにこの商談を持ちこんだのかは両者が知人関係にあったという

以外は明かでない[17]。しかしオウエン自身はアメリカにおけるラパイト (Rappite) の活動に既に10年以前から関心を持っていたようであり，1820年にはラップあてに彼らのアメリカでの活動の詳細について知らせてくれるようにとの手紙を自著（『新社会観』）と共に送っていたのである[18]。実験のための新天地を求めつつも「英国においては決定的最後の段階に達していた」[19]オウエンにとってR.フラワーのこの商談は強くひかれるものであった。オウエンは彼以上にハーモニー協同村実験の魅力に引かれた次男ウィリアムと共にその土地を調査すべく1824年10月にアメリカに向ったのである。

R.オウエンはその年の11月にニュー・ヨークに到着した。彼の名は当時のアメリカにおいても『新社会観』の著者であり，ニュー・ラナークの実験に成功した社会改良家として知られており，オウエン主義信奉者による協同村設立の計画さえ推進されていた[20]。ニュー・ヨークの名士たちの歓迎を受けた後，彼は12月にハーモニー協同村に到着し，ウィリアムらと共にその村の資産状況をかなり綿密に調査した。そして彼は1825年1月3日，既開拓地を含む2万エーカーの土地及び公共建物，工場，店舗，そして約700人を収容する住宅からなる諸施設を計3万ポンドで買収する契約書に署名したのである[21]。

彼はハーモニーにおける新実験計画を米国全土に訴えるべく契約後ただちに東部へ出発し，その年の2月と3月，2回にわたってワシントン連邦議会で，モンロー大統領以下政府要人を前に彼の一貫した主張である性格形成原理と新計画の概要について演説し，「全国の勤勉な，善良なる人々」[22]の来村を請うたのである。R.オウエンの演説によってこの新計画は米国知識人の関心を呼ぶとともに一般大衆の好奇心をもそそり，入村希望者が殺到し，その数は約800人に達した[23]。ニュー・ハーモニー村の開村式はこのような中で1825年4月27日に行なわれ，彼はそこで大略次の如き趣旨の演説を行った。

「私がこの国へやって来たのは社会の全く新しい状態を導入するためである。無知な個人主義から啓蒙された社会制度へと変革するためである。そこでは万人の利害は統一され，個人の争いの原因は除去されるであろう。幸福，徳，合理的活動はそこに生きている。しかしこの変革は一朝にして成されるものではない。それには時が必要である。『仲宿』(halfway house) がなければならない。……この地のこれからの名称であるニュー・ハーモニーはこの異常の旅での同行のために私が獲た最良の仲宿である。……ニュー・ハーモニーでは個人間の不平等や身分の相違は全く存在しない。ただ一部外部から輸入を要する科学者，教育家に対してある程度の金銭上の不均一が生ずるだけである。私は全人間の間に人為的な不平等が存在しなくなる時を熱望する。しかしながら私の如きこの制度の熟知者が出現するまで暫定的に私が執政する。……私はこのような制度が世界に確立されるのを見とどけるために生きているのである。」[24]

彼は更に続けて，この「仲宿」としてのニュー・ハーモニーを「準備社会」(Preliminary Society) と位置づけ，「このコミュニティの唯一の目的は全成員に最大量の幸福を提供すること」であり，「成員の性格や条件を改善し，共有財産を有する独立のコミュニティとなるのに準備するために設立される」ことを骨子とし，「村民の子どもは最善の方法で昼間学校に収容される」という教育条項をも盛りこんだ32ケ条からなる暫定憲法草案[25]を提案した。

ニュー・ハーモニーの実験は結果的にはわずか3年にして無残な失敗に終ったとはいえ，彼がこの演説のなかでニュー・ハーモニー村建設の第一段階を「仲宿」として位置づけたことは充分注目されて良い。彼は本計画を推進するに際して「一定期間の，ある程度の金銭的不平等」の存在を認めたように，必ずしも一挙に完全な理想形態を実現しようとはせず，3年間の準備期間を設けるなかで生産の円滑化を図ると共に住民を共産主義思想の所有者へと変革しようとしたのである。そのような意味において A.ベスターも指摘するように，この演説において示された彼の新社会建設計画は「起草に際して性急であったにも拘らず彼のこれまでの如何なるものよりも明瞭な」[26]方向性を持っていたと言うことができるのである。

しかしながらこの方針はまたある意味ではあまりにも一般的に過ぎ，村の整備，住民の私財の管理，生産計画等々の方法，手続に関しては全く示されていなかった。しかも彼はこの暫定憲法草案が全村民一致で採択されるや，ニュー・ハーモニーの統治権をウイリアム・オウエンに委託し，技術者獲得のために帰英してしまったのである。それがために，ウイリアムの指導力の欠如も手伝って，ニュー・ハーモニーの運営は開村当初から混乱に陥り，ラップ時代の整備された生産施設も熟練職人の不足，村民の生産意欲の欠如等によって充分機能しえず，開村以来増加を続ける村民[27]の生活保障すら困難な状況を呈するようになった。ウイリアムはその実情を父にあてて次のように書いたのであった。

「親愛なる父上。あなたが多くの技術者を募集しておられると聞いてわたしたちは驚いています。というのは，わたしたちが彼らを収容するためにもっと多くの家屋を建設しなければ，彼らに住居を与えることは不可能

だからです。……建築に必要な石炭や石やレンガ，そして木材，屋根板もなく，家を建てる以前にそれらを自給しなければなりません。……そしてこれらのことをするためには村の他の仕事を停止しなければなりません。……もしあなたがルイスビルの鋳造所からいくつかのストーブをもってきてくれれば，現在の家屋にもっと多くの人々を収容することができるでしょう。ストーブは大きくなくてよろしいし，安い方が良いでしょう。ベッドも，フトンのための羽毛やふとんのがわ，シーツ，毛布もありません。人々に充分なだけのそれらをあなたに買ってきてもらわねばなりません，砂糖もありません。まったくなくなってしまいました。河水が低いので水もくめません。その貯えは6週間で尽きてしまうでしょう。」[28]

このような状況のなかで村民の一般的感情を支配したのは「オウエン氏が戻ってくれれば事態はすぐに好転するであろう」[29]という期待であった。

彼は1826年1月2日に「知識の船荷」(boatload of knowledge) と共にニュー・ハーモニーに帰村した。この「知識の船荷」とはオウエンがニュー・ハーモニー村建設推進のためにその指導者として招請した知識人の集団のことであり，そのなかには彼の長男 R.ディル・オウエンの外に，当時一流の地質学者であり，アメリカに始めてペスタロッチ主義を導入した人物でもあった，マクルーア (William Maclure)，そして同じくペスタロッチ主義に基いてパリで教師をしていたフレタジョット (Marie Duclos Fretageot)，ペスタロッチの最も有能な補佐の1人であるニーフ (Joseph Neef)，あるいはフランスの自然科学者レスール (Charles Albert Lesueur)，オランダの著名な化学トルースト (Gerard Troost) 等が含まれていた[30]。この点から見ても，彼は暫定憲法採択後，ただちに渡英したことによって建設活動に空白を生じさせたとは言え，如何にニュー・ハーモニー協同村建設の意欲に燃えていたかを知ることができる。村民の一人ペラム (W. Pelham) はこの「知識の船荷」のメンバーを見て，「ニュー・ハーモニーには米国で最善の図書館と学校が存在するようになるであろう」[31]と述べた。しかし彼がニュー・ハーモニー建設の指導者として迎えたのは，彼の最初の意図に反して学者や教育家に限られていたことは注意を要する。すなわち彼は村の存在基盤をなす経済的側面よりはむしろ住民の合理的人間への形成という側面に，より重きを置いていたのであった。

ところで，相も変らぬ過酷な児童労働が存続し，労働者階級が貧窮にあえいでいるイギリスから帰村した R.オウエンの目に映じたニュー・ハーモニー村の状況は，W. オウエンの指摘した事実の存在にも拘らず意外にも外見的には成功し，繁栄しているかのようであった[32]。事実ニュー・ハーモニーはある面においては発展に向っているようであり，1825年末の『ニュー・ハーモニー・ガゼット』 (New Narmony Gazette 1825年10月1日創刊) は次のように記していた。

「一般的な見解は今や決定的に怠惰や悪徳に反対するようになっている。怠惰なメンバーは勤勉になるにちがいない。そして悪徳な人々は有徳な人々になるにちがいない。そうでなければ彼らは村の内奥に満足してとどまることはできない」[34]

村では公共集会がたびたび開かれ，住民はそこで自由に，活発に論議をかわし，そこでは「自由，友愛，情熱，青春と希望の国土」[34]が成長しつつあるようであった。帰村した R.オウエンが注目したのはまさにこの精神的側面での繁栄であったのである。すなわち彼は協同村発展の基盤をなす経済的側面よりはむしろ住民の意識変革に専ら着目し，そうした変革によって共産制社会への到達が次第に可能であると捉えていたようであった。

2. 平等村の建設

ニュー・ハーモニー村の現状認識において，また共産制社会への移行の展望において根本的誤びゅうを犯した R. オウエンは，しかしこのような一面的繁栄を見るや否や「仲宿」としての協同村を一挙に共産主義社会にまで引きあげる決意をしたのである。彼の決意は，「準備社会は9ヶ月前に設立されたばかりであり，R. オウエンがこの修練期間は2・3年継続されるべきであることを勧めていた」[35]ことを知っていた R.ディル・オウエンにとって非常な驚きであった。しかし R.オウエンはこの「平等村」への改組のための提案を1月25日に村民総会に提出したのである。同月26日にはただちに7人の憲法起草委員が選出された。この委員の中には R.オウエンと共に最初に渡米し，村の建設に尽力した W.オウエンやマクドナルド (Captain Macdonald)，そして今回入村したR.ディル・オウエン等が含まれており，R.オウエンとマクルーアは委員ではなくその顧問格の立場にあった。マクドナルドは憲法制定による規律の厳格さを恐れて抵抗したが，R.ディル・オウエンらの全面的賛成の下に1826年2月5日，「ニュー・ハーモニー平等村憲法」(Constitution of the New Harmony of Equality) が採択されたのである。この憲法は全15ケ条からなっているのであるが，それは「協同村の原理についての包括的な宣言」[36]とも言うべき次のような前文から始まっている。

「いくらかの人間家族が他の世界とは全く異った原理によって結合する時，他の人々の見解に対する正当な配慮は，彼らの結合の目的，彼らの諸原理，彼らの意図の公然たる宣言を必要とする。

我々の目的は全ての知覚力のある生物と同様に，幸福であるということである。我々の諸原理は，・全ての成人における性や境遇によって左右されない権利の平等，・義務の平等，しかしそれは肉体的，精神的形態によって修整される，・仕事と人生の慰安における協同的結合・財産の共有，・言論と行動の自由，・我々が生活する村の諸法律への服従等である。……これらの原理にもとづいて署名した我々は，我々自身と我々の子供と人類の利益のために社会と平等村の中で人々を形成するのである。そして我々は次のような一致と協同の条項に同意する。

第一条　社会はニュー・ハーモニー平等村と称す。

第二条

第一項　村の全成員は一家族と見なされ，何人も仕事の量によって高低の評価は為されない。

第二項　年令に応じて可能な限りの同一の食事と衣服と教育。

第三項　各成員はこれ以降村によって採用される諸規則に従って全体の善のために最高の奉仕を行なう。

第三条　全ての成員に対して最高の身体的，道徳的，知的教育を行なうことが村の第一の目的である。

第四条

第一項　立法権は議会（Assembly）にある。

第二項　議会は21歳以上の村の住民全てからなり，彼らの6人につき1人が仕事の処理のための定数を形成するのに必要である。

第五条

第一項　村の行政権は書記，財務係，村民代表，4人の管理者から成る評議会に属する。

第二項　書記，財務係，村民代表は議会で選出される。

第三項　村は次の6つの部局に分けられる。すなわち，・農業・工業・文学，科学，教育・家庭経済・一般経済・商業

（本条第四項から第九項まで省略—岩本）

第六条　今後議会の大多数の同意なくしては入村は認められない。

第七条　村の財産は永久に村に信託される。

第八条　各成員は自分の意図を村に1週間通知することによってメンバーを辞退する権利を有する。

第九条　規則によって定められた成員以外は何人も個別契約や債務関係を結んではならない。

第十条　村へ持ち込んだ金銭は村に託される。

第十一条　各成員は知識，言論そしてとりわけ宗教問題について最高の自由を享受する。

第十二条　成員が死去した場合，その子どもは成員の全ての特権の享受を継続する。

第十三条　村の成員間の全ての誤解は村内で調停される。

条十四条　この制度は如何なる秘密や排斥にも絶対に反対するが故に，あらゆる実際的便宜が村の規則に精通することができるために外来者に与えられる。

第十五条　本憲法の改廃は議会の全メンバーの4分の3で行われるが，それは連続4週間の公開集会で検討された後に発効する[37]。

R．オウエンの帰村によって村の運営の円滑化を待望した住民は，この新憲法によって更に発展して行くであろうことを期待した。従ってオウエンの宗教的自由主義に反対した少数を除いてほとんどの住民は新憲法同意の署名を行い，居住を継続したのである。住民ペラムはその期待を次のように記している。「今日までわれわれは混乱と議論とによってエネルギーを消耗したが，これからはそのようなことはないであろう。6ケ月後にはニュー・ハーモニーの機構は時計のゼンマイのように正確に動くであろう。」[38]と。

新憲法の制定はペラムの言葉に見られるように住民に大きな期待を抱かせたのではあるが，それはベスターも指摘するように，「実際には経済的な事柄に関してあらゆる点において準備社会の憲法よりも不明瞭」[39]であった。たとえば，準備社会の憲法のなかの「金銭上の不平等の許可」という条項は削除されたものの，真の平等をどのように実現して行くのか，余剰生産物の管理，退村者の財産の清算，個人の労働量の決定等々に関するすべてが不明確であった。そして更に重要なことは，ニュー・ハーモニー平等村そのものがオウエンの手に属するのか否かも明記されていなかったのである。

ニュー・ハーモニー村の共産主義的建設はこのような曖昧な位置づけのうちにスタートしたのであり，それは共産主義社会の建設はおろか，村そのものの存続が極めて困難であることを予想させるものであった。事実，新憲法制定後間もなく発表された労働白書[40]が，村の経済の見通しは今後約40年間の耐乏生活を余儀なくするであろうことを明かにするや，村民の間に大きな動揺が生じたのであり，それを主要な契機としてオウエンの宗教的

寛容に不満を持つ分子たちは早くもこの共産村からの分離，独立を図ったのである。これが R.オウエンの承認の下に，2月15日に設立された「第2号村」(Community No. II）であり，それは既に共産村の崩壊をわれわれに予知させるものであった。この「第2号村」の設立は，村内の無秩序を公然化するものであり，村民は準備社会期より連続する生産の停滞による士気の沈滞と相まって大きく失望したのである[41]。そして議会はこのような事態に対処すべく，憲法制定後約2週間にして全会一致で向う1年間の1827年1月1日までのオウエンの独裁を可決したのである。住民のオウエンに対する期待から来る協力と彼自らの努力によってこれ以降村内はやや小康を保ち，特に4月から5に月かけては村の学校には約400人もの生徒が集るほどであった[42]。そして5月28日にはマクルーアが村の運営をより円滑ならしめるために，同職者がひとつの部落を構成し，各部落間で生産物の交換を行うという提案を行い，それは5月末に承認され，3つの職能別組合が設立された。それは教育組合(School Society)，職人組合 (Mechanic Manufacturing Society)，農牧組合 (Agricultural and Pastoral Society) であり，それらは中央の連合評議会 (Board of Union) で統制され，各組合の充実が目ざされたのである。各組合の最高責任者が各々誰であったのかは明かではない。しかしわれわれの主たる関心事である教育組合はマクルーアによって統括されたのであった[43]。

ニュー・ハーモニーはこのマクルーアの提案による改革によって更にしばらくの安定を継続することができたが，村の運営の基盤を為す生産の問題に関しては依然として消費が生産を上回る状況を克服しえなかったのである[44]。しかしニュー・ハーモニー平等村建設の挫折を決定的にしたものは先の3つの組合間で生じた紛争と，4月2日に入村して以来とりわけ R.オウエンに向って厳格に共産主義原理を実行することを迫った P.ブラウンなる攪乱分子の言動であった[45]。すなわち前者の3つの組合間の紛争とは教育組合と他の2つの組合との間の土地境界争いを発端とし，2組合がその子弟の教育組合への教育費納入を拒否した事件であり，後者の P.ブラウンの策動とは村の財政状況を記入した帳簿の存在が共産主義の理念に反すると攻撃し，オウエンは実は大土地所有者にすぎず，従ってオウエンは村に全財産を寄附すべきであると主張し続けたことであった。ニュー・ハーモニーの住民はこれらの事件によって再び動揺し，「再編と再結合なくしては村の存続が不可能」[46]になったのである。こうしてオウエンは9月17日に村の第4回目の改組を提案したのである。それは教育組合を除く他の2組合を統合し，統合した組合を「第1号村」(Community No. I）と称し，R.オウエンおよび R.ディル・オウエンと他の3人の委員がそれを統括するというものであった。従ってここで明かにニュー・ハーモニー平等村は R. オウエンを中核とする「第1号村」とマクルーアを中核とする教育組合との2つに分裂してしまったことを見ることができるのである。

R.オウエンの提案は10月2日から施行されたのであるが，ニュー・ハーモニー平等村が実質的に2分されたことが示すように，これ以降オウエンとマクルーアとの間の不和が公然化し，村の建設時の財産分担問題，教育方針の相違等において両者は全く協調することが不可能となってしまった。

村の有力な指導者の不和は，これまでにいくども崩壊寸前にまで至った村を一挙に崩壊へと導くことになってしまったのである。すなわちオウエンと真向から，それは多分に感情的であったが，対立するようになったマクルーアは12月にはオウエンの干渉から逃れ，自らの方針を貫徹すべく教育組合買収の計画を発表し，完全な独立を図ったのである[47]。村の機関紙『ニュー・ハーモニーガゼット』はこの行動に対し，「われわれは彼らがわれわれの社会とその目的を信頼していないと推測する」[48]と非難したのである。そしてオウエンは次項において明らかにするようにマクルーアの教育実践が充分な成果をあげていないことをとらえ，それに対抗すべくマクルーアの意志から独立した教育機関を設立しようとしたのである[49]。

このような状況に至ってはニュー・ハーモニー平等村が発展に向うことは不可能であり，住民間の争い，生産放棄が急速に顕在化したのである。特にマクルーアによる教育組合買収計画の発表後は，村の行政機構は実質上ほとんど機能しえず，ついにオウエンはニュー・ハーモニー平等村の実験の放棄を決意し，翌年1月には私財を売却処分してしまったのである。R. ディル・オウエンと W.オウエンの筆になる[50]『ニュー・ハーモニー・ガゼット』に掲載された実験失敗の表明は3月28日に，そして R.オウエン自身のニュー・ハーモニー住民への告別演説は4月13日に為されたのであるが，以上述べてきたように，村の実質的活動は1826年12月までであり，1827年初頭からは，「町の大部分が多くの人々の私有になり，いろいろの小商舗ができ，(平等村憲法の理念とは―岩本）全く矛盾する様相を呈し始めた」[51]のである。オウエンはこのような状況のなかで4月13日に大略次のような最後の演説を行なって6月下旬に退村したのである。

「私はこの新しい国で，同胞を迷信と精神的堕落か

ら，どこまで救い得るかやってみる決心でここに来た。うまくゆけば，この実験が一つの模範となって誰もが追随し又それが万人の利益になろうからだ。……私はここでひとつの新しい行きかたをしてみた。50年の政治的自由がアメリカ国民に準備してきたもの—即ち有能な自治—のゆえにそののぞみをおこしたのである。自分は土地，家，夥しき資本を差出した。……だが実際にやってみてわかった。この試みは時期尚早だったのだ。……個人主義制度に訓練された家族は，お互いのための忍耐，慈愛の道徳性を獲得しえないのだ。しかもこれらの性質こそ全メンバーの間に充分な調和と信頼を促進するに必要なものであり，それなくしては村は存立できないのである。……」[52]

Ⅲ　ニューハーモニー平等村の教育

R．オウエンによるニュー・ハーモニー平等村の建設は，前項で明かにしたように彼の不在であった準備社会の時代と，彼が共産主義憲法を制定し，村の建設に自ら取り組んだ時代の2つの段階から成っている。準備社会の時代を第一期とし，共産主義憲法制定以降の時代を第二期とするならば，彼のニュー・ハーモニーにおける教育活動の解明は当然第二期が主たる対象となる。しかし準備社会期の教育は，彼が不在であったとは言え，彼自ら起草した新憲法を制定し，それによって新憲法下での教育活動の重要な基礎を為したという意味において第一期の究明を回避することはできないのである[53]。

1.　準備社会期の教育

R．オウエンはニュー・ラナーク統治の時代からそうであったように，新社会の建設初期にあっても児童の教育については周到な注意を払っていた。彼は暫定憲法のなかでまず，「メンバーたちはこの社会とニュー・ハーモニーの現状が提供するところの生活，慰安，そして教育の利益を享受するであろう」ことを明かにし，そして更に次のように規定した。「子どもたちは最善の方法で昼間学校に収容され，彼らの両親の家庭で寝食を共にすることになるであろう。しかしながらメンバーのいく人かが彼らの子どもを寄宿学校に置くことを望むなら，彼らは委員会と特殊な，個別の契約を結ばねばならない。しかし如何なるメンバーも一週間を越えて社会に子どもをあずけっ放しにしておくことは許されない」[54]。

W．オウエンは父のこのような方針をうけてそれの実現に努力し，生産活動の停滞とは逆に教育活動はかなりの成果をあげていたようである[55]。たとえばR．オウエンの不在の間に，「もしわれわれが全ての見解を調和しえないなら，全ての心を結合するように努力しよう」という標語を掲げて創刊された村の機関紙『ニュー・ハーモニー・ガゼット』(週刊)はその第3号において次のように記している。「教会は小ぎれいな木造で，白塗にされている。その尖塔には2つの重いベルが備えられている。そしてその建物は宗教的な集会と，昼間及び夜間学校のために確保されている。その学校には初等教育を望む全てのメンバーが入学している。寄宿学校は便利な，快適な3階だてのレンガづくりの建物で，90フィート，65フィートの広さがあり，160人の児童を収容している。」[56] 昼間，寄宿学校とも，それに要する費用は一切「公費」[57] (public expense) でまかなわれ，従って無料であった。W．オウエンらはしかもこのニュー・ハーモニーの教育施設を村民以外の子弟にも開放し，その教育を充実しようとしていたようである。すなわち『ニュー・ハーモニー・ガゼット』は創刊号以来第4号まで毎号次のような広告を掲載しているのである。

> ニュー・ハーモニー寄宿学校
> 〔委員会監督のもとに〕
> 両親が当社会のメンバーではない若干名の児童は委員会への願書（郵便であれば切手貼付）にもとづいてこの施設に収容される。
> 料金—寄宿，洗たく，衣服，健康管理，そしてこの施設における様々な教育のために年100ドルの4回ずつの先払い

[58]

この広告は，寄宿学校の内容をうかがう上で貴重ではあるが，われわれはこの時期の全ての学校における具体的な教授内容，方法等についてほとんど知ることができない。『ニュー・ハーモニー・ガゼット』においても第5号以降 R．オウエンの帰村に至るまで，特に学校教育活動の成果及びその問題点等についてはほとんど論及されていない。しかし機関紙は第7号から第11号まで，父のニュー・ラナーク時代の教育実践の助手的役割を果し，父の教育方法に深く共鳴した R．ディル・オウエンの『ニュー・ラナーク教育制度概観』(An Outline of the System of Education at New Lanark. 1824) を再録，連載し，そしてまた13号から18号までは，R．オウエンが英国で行った様々な講演（『ニュー・ラナーク住民への講演』1816．『シティ・オブ・ロンドン・タヴァーンの講演』1817．等）を再録，連載していることから，W．オウエンは父の不在中はニュー・ラナーク時代の教育目的，方法を踏襲し，そして住民に対して父の新社会の理念を理解させることに努力していたことを知ることがで

きるのである。

2. 共産主義憲法下の教育

R.オウエンの不在中にW.オウエンの努力によって村の教育活動が着実に展開されていたことは帰村したR.オウエンにとって極めて満足すべきものであった。しかしW.オウエンらによるこの活動は既に明かにしたように，ニュー・ラナーク時代の方針を踏襲したのみで，新しい協同村にふさわしい教育を積極的に創造して行こうとするものではなかった。特にR.オウエンが『ラナーク州への報告』において主張した人間の発達における労働の教育的意義への注目はほとんど為されず，従ってまた労働教育の実践も行われることがなかったのである。この労働教育の実践は人間の全面的発達を企図する共産主義憲法の制度と，その体制の下で積極的な教育活動に携ったマクルーア，ニーフ，フレタジョットらによって推進されたのである。

マクルーア，ニーフ，フレタジョットらはいずれもペスタロッチ主義，とりわけその労働教育の側面に共鳴した教育家であったが，そのなかで最も中心的役割を果したのがマクルーアであった。彼は1763年にスコットランドに生れ，R.オウエンと同じく若くして財を為した人物であった。しかし彼は19世紀末には実業界から引退し，米国へ渡り，市民権を獲得して地質学，鉱物学の研究に従事した。彼はその研究成果である画期的な米国地質図の作成によって米国での名声を確立し，1817年にはフィラデルフィア自然科学アカデミーの総裁に就任した。マクルーアはこのようにしてアメリカの自然科学分野における指導的人物となったのであるが，彼はまた他方においてR.オウエンと同じく博愛主義者[59]として労働者階級の主張を支持する熱心な社会改革家でもあった[60]。

マクルーアによれば当時の社会は「非生産階級と生産階級の2つに分れており，両者の利害は相対立し，矛盾するもの」[61]であった。そして「支配階級は非生産階級に，被支配階級は生産階級に各々属している」[62]のであるが，実は「労働が全ての生産の源泉であり，社会の全収入は労働者によって作られる」[63]のであるから，当時の社会の現実は全く「正義に反する」[64]ものであった。彼にとってこのような社会を変革するための最も重要な仕事は大衆の無知を克服することであった。なぜなら彼によれば，「政治社会においては知は力なのである」[65]から，「充分に教育された人々を長い間奴隷状態におしとどめておくことは不可能」[66]なのであり，従って当時の如き社会の誤れる状況の克服は労働者階級が知的な啓蒙を受けることによって始めて可能になるのであった。しかし当時の学校は彼によれば「怠惰な非生産階級の子弟を教えるため」[67]に作られているのであり，それによって生産階級と非生産階級の間の「知識の不平等を増大させている」[68]のであるから，彼は既存の学校には何ら期待することができなかった。彼にとって望ましい学校とは空虚な知識のみを伝達するのではなく，子どもたちが将来社会変革を志向する知的な生産階級へと成長して行くことのできるように，知的教育と生産技術教育が結合された学校なのであった[69]。彼のペスタロッチへの傾倒はこのような理想から生れたのである。マクルーアはヨーロッパ旅行中，偶然イヴェルドンに，ペスタロッチの学校を参観したのであるが，そこで彼は「子どもたちが疲れることなく1時間以上もひとつの課題にとりくみ，そしてその子どもたちの活動は目ざされた目的に対して愉快で，情熱的で，迅速である」[70]ことを知り，「ペスタロッチ主義は有益な知識を与える制度のうちで最善のものである」[71]と感じたのである。

彼はこのようなペスタロッチ主義の学校をアメリカにも開設すべく，パリの学校でペスタロッチ主義を実践していたJ.ニーフをペスタロッチに推薦されてアメリカへ招き，アメリカ最初のペスタロッチ主義の学校をフィラデルフィアに設立したのである。

このようなマクルーアがR.オウエンに始めて会ったのは1824年8月であった。それはマクルーアがスペインにもペスタロッチ主義の学校を建設すべくヨーロッパに再び渡ったが，スペインの政情不安のためイギリスに逃れた時であり，更にまたR.フラワーがR.オウエンにハーモニー村買収の商談を持ちこむ1週間前のことであった。マクルーアはニュー・ラナークでのオウエンとの出会いについて次のように書いている。

「私はニュー・ラナークで数日の時を人生のうちで最も愉快に過した。そして私は執ような悪意ある反対にも拘らずオウエン氏の勇気と忍耐によって行われた社会の巨大な改善をつぶさに見た。私はこれほど幸福で満足気な大人や子どもたちを見たことはない。そしてまた何らの圧制や身体的強制もなく，このように秩序だった，愉快な，真面目な社会を見たことがない。……私はオウエン氏が国家と教会の強力な団結に対抗しているのに成功しているのを見て，私も実験農学校をアメリカで経営する勇気がわいてきた。」[72]

ニュー・ラナークにおけるオウエンの社会改革の試みと，そこでの教育の充実に魅せられたマクルーアは，その滞在中にオウエンがアメリカで新実験計画の遂行を意図していることを聞くに及んで，オウエンを次のようにたたえ，彼もまたオウエンと共に新しい実験に参加する

決意をしたのである。

「オウエン氏は……人類を幸福にし，自主的な労働から引き出される無限の満足や喜びや幸福を提供する意図をもつものである。この世において人間についての正しい理念をもつヨーロッパ唯一の人間以上に満足と喜びを与えることのできる人はいない。……そしてもしそれが成功すれば（私はそれを心から願い，そしてそうなるであろうと思うのであるが）それは人類史上ひとつのエポックを記すことになるであろう。」(73)

イギリスから帰国後，J．ニーフと共にアメリカのペスタロッチ主義の学校の建設と普及(74) に努力したマクルーアは，1826年1月にニーフ，フレタジョット夫人らを伴って R．オウエンと共に「知識の船荷」の一員としてニュー・ハーモニー村に到着した。我々の注目すべき労働教育の実践はこのペスタロッチ主義者マクルーアらの入村によって始めて具体化されるに至るのである。ところで，前項で明かにしたようにニュー・ハーモニー平等村の建設は基本的に1月から5月までと，5月末から12月までの2つの時期に区分されていたのであり，教育実践の充実もこの2つの時期に相応して図られてきたということができる。すなわちマクルーアのニュー・ハーモニー到着の1月から教育組合設立前の5月までと，それ以降の実質的崩壊に至るまでの12月までである。しかし教育実践に関しては，このふたつの時期にわたって一貫してその中心的指導者として活動したのはマクルーアであり，その基本方針は1月以来大きな変化をとげることなく継承されたのであり，従って本項では，我々はこの時期的推移を考慮しつつ，ニュー・ハーモニー平等村一年間における教育の実態を究明して行くことにする。

さてマクルーアは入村するやただちにこの村をペスタロッチ主義教育の中心地たらしめんとして，ニュー・ハーモニー平等村の教育制度の整備，確立に着手した。その第一の仕事はまずコース・オブ・スタディの作成であった。彼は教育の基本原理を次のように明らかにしている。

「最大の，あるいは根本的原理は決して子どもに彼らが理解することのできないものを教えようとすることなのではない。……その最も根本的なことは，あらゆる感覚の広範な，正確な使用を実践し，連合を迅速にすることによって全ての精神的，肉体的機能を行使し，改善し，完全にすることである。そしてまた比較を早め，注意深くアレンジすることであり，思慮深く，公正に推論することである。そして更に偏見から解放されて結果を作り出し，無知や誤びゅうの絶えざる源である想像の幻惑を注意深く回避することである。」(75)

マクルーアは上のように教育の基本原理を述べた後に，数学，科学，書き方，音楽，体育，語学，手工等についての各々の内容，方法を論じているのであるが，ニュー・ハーモニーの教育をユニークなものとしていた手工業を中心とする労働教育については次のように述べている。「石版印刷，銅版印刷等は他の機械技術と同様，子どもが手工訓練を受ける学校内で行わなければならない。少年たちは少なくともひとつの機械技術を学ぶ。例えばタイプや印刷である。この目的のために，各学校には印刷所が設けられ，それによって基礎的な本の全てを出版する一助となるであろう。」(76)

教育課程を以上のように明かにしたマクルーアは更に学校制度の整備を行った。学校制度に関しては既に明かにしたように準備社会期において昼間学校，夜間学校及び寄宿学校が設立され，その基礎が確立されていたことから，マクルーアの仕事はこの制度を基本的に踏襲し，その上に立って彼の理想である労働教育を導入することであった。彼の計画した教育制度はまず2歳から5歳までの男女児童を収容する幼児学校（infant school）と，更にその上に5歳から12歳までの男女を収容する上級学校（higher school）及び12歳以上の男女を収容する成人学校（adult school）を設立することであった。この彼の計画はただちに実行に移され，準備社会期の学校と同様授業料は村民は全て無料(77) であった。各学校の在籍者，教育内容，指導者等を表示すれば下記の如くになる(78)。

名称	年　令	指導者	教育内容 ※	在籍者数 ※※
幼児学校	2歳～5歳	フレタジョット	ダンス，音楽，博物，地学等の直観教授	男女あわせて約100人
上級学校	5歳～12歳	ニーフ	読，書，算ダンス，音楽	男女あわせて180～200人
成人学校	12歳以上	M．フィクパル	数学，化学実験農業，製図等	男女あわせて80人以上

※　幼児学校と上級学校の教育内容に関しては，ニュー・ラナーク時代のそれと同様である旨の指摘しか確認することができない。(G. B. Lockwood, p. 241) 従ってロックウッドの指摘を受ければ上記の如くになるが，以下の叙述で明かなように，このふたつの学校は上記以外に労働が課せられていた。

※※　在籍者数についても，これもロックウッドの指摘によるが，いずれも「繁栄期」と記してあるのみで，具体的に1826年の何月頃を指すのか明かでない。しかし前項で考察してきたことから判断すれば「繁栄期」とは，村が相対的に安定を保った4月～5月を指しているものと思われる。

マクルーアはまず以上のような3段階からなる学校を設立したのであるが，更に上級学校に附属する教育機関として実業学校（industrial school）を設置したのである。この実業学校は5歳から12歳までの生徒が上級学校においてある程度の知的学習を積んだ後に一定期間全員に実業教育を授けるために設けられたのである。この実業学校には，剥製術，印刷，大工，鉄工，料理，裁縫，農業，製靴，製図，車輪製造等の科目が設けられ，子どもたちは彼らの希望によってひとつの科目を選択し，その修得が認められると他の科目の修得に移ることが認められ，夜間は作業場の階上に宿泊するシステムになっていた。このマクルーアの手になる実業学校の設置は，アメリカにおいて第2番目の設置[79]という点において先駆的意義を有するものであったが，それはニュー・ハーモニーにおける彼の教育実践のなかでも，最も重要な位置を占めるものであった。すなわち彼の教育理想は先に明かにしたように，労働者の無知の克服による社会変革の理想と分ち難く結合していたのであり，従って子どもたちが知的能力と職業技術的能力とが統一された有能な労働者へと成長して行くことが目ざされていたのである。マクルーアにあってはこの実業学校設置の目的はこのような彼の社会変革論を実践に移すという意味を持っていたのである。

しかしこの実業学校には実はもうひとつの重要な意味が含まれていた。すなわちマクルーアは学校に生産を導入することによって収益をあげ，学校維持費自体をそれによって捻出するという，いわば自給（self-support）の意味を担わせていたのである。このような目的を持った実業学校の実態はどのようなものであったのか。われわれは以下若干の資料によって見て行くことにする。まず創設者マクルーア自身の説明は次の如くである。

「われわれはここへ来て2ケ月になった。（1826年3月—岩本）そして新しい制度の実験の効果はいくらかあがっている。……既に男生徒たちの一部は自分たちで靴を作るようになっており，それは村の靴の全てを作ることになるであろう。彼らは同様にして仕立職，大工職，織物職等を学校で実習するであろう。そしてそれらの全ての仕事は交代で実習されるのである。われわれは村の400人近くの生徒を集めており，その他村以外の生徒も集めている。少女たちも少年と同様フレタジョット夫人に教育され，木綿工場，羊毛工場，洗たく，料理場等で交代に働いている。彼らは半日以上は同一の労働に従事しない。それによって彼らの疲労を軽減するのである。

私の経験によると，正しい管理の下では子どもたちは最善の，そして最も有益な授業によって自らの衣服や食糧を自給することができるのである。この学校は規模において，能力において，機械の完備においてアメリカ第一等のものとなるであろう。……」[80]

マクルーアは実業学校開設間もない頃既にそれがかなり円滑に運営され，今後一層充実して行くであろうことを自信を以って述べているのであるが，このマクルーアの説明の約1ケ月後の4月末にニュー・ハーモニーを訪れたワイマールのチャールズ・ベルナルド公はその実態を次のように記している。

「私はニーフ教授が，生徒たちを労働させるために学校からつれ出しているところを見た。軍事訓練は子どもの教育の一部をなしていた。私は男生徒たちが2列に分れて労働しに行くために行進しているのを見た。途中で彼らは様々な旋回を行った。全ての少年少女たちは健康そうで，楽しそうで，生き生きとし，決してはにかんではいなかった。野原や庭園での少年たちの労働は，新しい柵をつくることであった。少女たちは女性の仕事をしていた。彼女たちは労働と教育において男生徒と同様にまったく抑圧されていなかった。これらの小さな，かわいらしい子どもたちは青年への幸福な道をあゆんでいた。

ニーフ夫人は，私に彼女も居住している子どもたちの宿舎を見せてくれた。そこには少年の寝るための場所が整えられていた。各生徒はわらの小児用ベッドで寝ていた。……私は以前の教会，すなわち現在の建具屋や靴屋になろうとする少年たちのための作業場へ行った。これらの少年たちは貯蔵所になっている教会の二階で寝た。……われわれが出会った少女の大部分はむぎわら帽子をつくる仕事をしていた。」[81]

創設者のマクルーアやベルナルド公の記述は，ニュー・ハーモニーにおける実業学校が極めて満足すべき成果をあげ，生徒も健全に成長していることをわれわれにうかがわせるものであるが，しかしそこで実際に教育を受けた生徒の受けとめ方は上の2つの説明とかなり異っているようである。たとえばサラ・コックス・スロール夫人は彼女の学校時代を回顧して次のように記している。

「わたしたちは1週間に1度だけ，つまり土曜日にパンを食べた。……わたしたちは朝食後，軍事的秩序をもって村の第2号棟まで行進した。私は教室の一方の側を覆っている黒板があり，ひものついたボールで計算を学んだことを覚えている。私たちはまた歌の練習をし，それによって様々な部門の学習に親しんだ。……夕食事にはトウモロコシがゆとミルクをとった。私たちは夕暮時には天井からのひもでつるされた小さなベッドで寝た。ときどき列の端の子どもが自分のベッドをゆすり，隣り

のベッドにぶつけた。これは得意の気ばらしであったが，教師たちを大変悩ませた。……寄宿学校の生徒は彼らの両親に会うことは通常許されず，その許可はまれであった。私は両親に2年のうちに2回会っただけであった。私たちはいつも歌っていたちょっとした歌を持っていた。

第2号棟の豚たちはおりの中にとじこめられている。
外へ出ると，それは時々しかなかったが，
外へ出ると，あちこちうろつき回る。
なぜなら，恐ろしい老ニーフがわれわれをみつけ出すから。」(82)

サラ・コックス・スロール夫人の回想がニーフについて触れていることから，それが上級学校と実業学校の状況を示していることが明かである。そして彼女の回想からわれわれが読みとることのできることは，マクルーアがベルナルドの楽観的な叙述とは対照的に子どもたちが必ずしも生き生きと学校生活を送っていたわけではなかったということなのである。この事実を裏づけるものとしてわれわれは父 R.オウエンのニュー・ラナーク時代の人道主義的教育に深く傾倒していた R.ディル・オウエンの記述をあげることができる。ディルはマクルーアらと共にニュー・ハーモニーに到着すると同時に村の教育に従事したのであるが，当時の教育の状況について次のように記している。

「私が学校の仕事に最初にたずさわったころ，教師たちはときどき体罰を用いていた。私はそれを厳重に禁じた。その後しばらくたって最年長のクラス（上級学校を指すと思われる。―岩本）の教師は私に言った。『これらの無秩序な悪童どもを統制することが困難であることがわかりました。彼らは私がむちを使うことが許されないことを知っているのです。そして私が彼らを秩序に従わせようとすると彼らは私に反抗するのです』と。私は彼にむちなしで子供たちをどのように統制して行くことができるのかを示してやろうとした。しかし彼は主張して譲らないのである。『もしあなたが自分で数週間試みたら，オウエンさん，私の方が正しいことがわかるでしょう』と。……」(83)

ディルは上のように記した後に，彼自ら体罰なしの教育が可能であることを証明するために実践し，それが彼の場合に限って成功したことを明かにしているのであるが，しかしニュー・ハーモニーの教育全体としては，スロール夫人の「歌」の内容が示すように，必ずしもニュー・ラナーク時代と同様の集団主義的精神に貫かれた，生き生きしたものではなかったと言うことの方がより正確のようである。

開村以来そこでの教育を W.オウエンやマクルーアらに全面的に委任してきた R.オウエンといえども，このような教育の事態を全く傍観していることはできなかった。彼は1826年8月初頭，ついにマクルーアらによる教育組合での教育を補充する形で，新な社会教育を開始したのである。この教育は，子どもから大人に至るまでの全村民をホールに集め，地球儀や地図等の視覚教材をも使用した意欲的な講義であり，数週間にわたって続けられたのである。彼らはこの講義のなかで，「この（講義の）過程によって，諸君はこれまで行われてきた如何なる教育制度よりも立派な教育と価値ある知識を得るようになるであろう」(84)（括孤内岩本）と述べることによって，マクルーアらの教育を暗に批判したのである。マクルーアはオウエンのこのような批判と活動に対して，彼自身の教育理想や実践に基いた反論を行うことなく，ただ「オウエン氏の環境論は住民たちの理解を越えるものである」(85)と述べるのみで，専ら，彼が入村時にオウエンと共に村の建設のために支出した資金の使途をめぐって，「オウエン氏のように乱費していては，如何に大きな財産でも（この村の運営を）続けて行くことはできないであろう」(86)（括孤内岩本）と述べるにとどめているのである。オウエンはマクルーアとは別の意味で，ニュー・ハーモニーにおける教育について具体的な批判を行わなかった。しかし村の実験の失敗が明白になり，そしてまた自らもその失敗を認めた告別の辞のなかでは，かなり具体的にマクルーアらの教育に対する批判を行ったのである。彼は次のように述べている。

「諸君はまた，主たる困難が，子どもの教育にたずさわり，そしてそれらの制度を実践に移すのに遅れをとったマクルーアによって連れてこられた教授や教師たちの間の意見の相違から生じてきたことを知っている。……私がこれらの人々に対して，この重要なプランの一部を遂行して行くために持っていた無限の信頼がどれほど大きく裏切られたことであろうか。村のすべての子どもが各々の教授や教師たちの持っているすぐれた資質の恩恵を受けるような充分に整備された施設を作るのにかわって，各々の教師たちは一部の子どもたちの教育を行ったのであり，それによって彼らは他の生徒たちとの交わりを妨げられたのである。

実践におけるこの誤りによって，私がその中心眼目としていた目的は達せられることがなかったのである。すわち，すべての子どもが同じ習慣，性向，感情で教育されるべきであり，ひとつの不一致の感情もなく，一大家族の成員として誠実に育てられることが私の最大の希望であったのに，実際には，子どもたちは様々な習慣，性

向，感情のなかで教育されてしまったのである。……」[87]

以上のようなオウエンの批判によって明かなことは，それがマクルーアの実践における労働と教育の結合，または両者の関係についてではなく，むしろ集団的訓練，集団づくりの欠如を指摘していることである。すなわち彼のマクルーアに対する批判は，オウエンがニュー・ラナーク時代にその実現に最も意を払った集団主義的な教育，換言すれば，すべての子どもが等しく幸福になる教育がニュー・ハーモニーにおいて本質的に目ざされていなかった点に向けられていたのであり，彼が8月以来全住民を一堂に集めて自ら講義を行い，村の団結を説いたのも，まさにこの点を強調したかったからであると考えられるのである。しかしオウエンが労働教育の実践そのものに対して直接的批判を行わなかったことは，マクルーアの実践する労働教育を彼が全面的に承認したことを意味する訳ではない。むしろ両者の間にはその目ざす理念において根本的相違があったといわなければならないのである。たとえば既に引用した如くマクルーアは入村2ケ月後のニュー・ハーモニーの学校教育の説明のなかで，フレタジョット夫人の指導下にある子どもたちが木綿工場，羊毛工場，洗たく場，料理場等で交代に働き，村の生産の大きな助けとなるであろうことを強調しているのであるが，彼女の指導下にある子どもたちと言えばそれは2歳から5歳までの生徒であり，このような極めて幼少の子どもたちに生産を半ば強制し，収益のみを目的とするかの如き方針は，ニュー・ラナーク時代のオウエンの人道主義的実践とは大きく異るものであった。すなわち，オウエンは，ニュー・ラナークにおいてとりわけ幼少児童が過酷な労働から解放されることの重要性を正しく認識し，「仲間を幸福にすること」[88]を最大の目的として幼少の子どもたちが過重な肉体的負担をかけられることなく，ダンス，音楽，遊戯によって将来豊に成長し，発達して行くための基礎づくりを志向したのであり，そのような実践をニュー・ハーモニーにおいていっそう充実しようとしたのである。しかもまた，ニュー・ハーモニーの成人学校では，F．ボードモアによれば，そこでの労働によって6週間で900ポンドの収益をあげていた[89]のであるが，ニュー・ハーモニーにおける労働が資本主義社会のそれとは幾分質を異にしていたとは言え，1日の生産労働を終えた青少年を夜間の成人学校において収益を目的とする労働に駆り立てたことは，「固苦しくない講話」[90]によって成人に豊な教養を与えることを意図したニュー・ラナークのそれとは異るものであった。従って以上のように見るならば，マクルーアにとっての労働教育とは，その本質的意義がオウエンの理想とするような，児童，青年のすべてを集団的に成長，発達させることにあったというよりはむしろ生産第一主義に立脚した，学校の自活（self-support）の実現にあったと見ることができるのであり，彼はこの目的の遂行のためにはオウエンの重視した体育すら「その代用として農業，園芸」[91]が採用されるべきであると主張したのである。

ニュー・ラナーク時代の人道主義的実践をニュー・ハーモニーにおいて継承し，それをいっそう充実させて行くことを企図したオウエンにとってこのようなマクルーアの，児童の集団的成長の視点を欠落させた生産至上主義的労働教育の実践は大きな不満を抱かせるものであり，マクルーアの労働教育の実践に対するオウエンの批判も集団主義の立場から為されたと見ることができるのである。

ニュー・ハーモニー平等村における教育は，このようにオウエンとマクルーアの教育理念の根本的対立が顕在化するなかで実質的に丸一年間で終結した。R．オウエンはニュー・ハーモニー退村後もなお新大陸において新たな実験の地をさがし求めたのであるが，莫大な財産を費した彼にとって新たにニュー・ハーモニー規模の実験を行なうことはもはや不可能であり，労働者階級の団結のたかまりがようやく見られるようになったイギリスへ帰国したのである。

Ⅳ 結　　語

以上われわれはニュー・ハーモニーにおける労働教育の実態についてやや詳しく述べてきたのであるが，そこで明かになったことは，われわれの注目すべき労働教育の実践は直接に R.オウエンによってではなく，むしろペスタロッチ主義者の W.マクルーアらによって主として行われ，しかもまたこのマクルーアらによる実践はそれが何ら児童の集団主義的精神を涵養し得なかった点においてオウエンによって厳しく批判されたことであった。

ところでオウエンがマクルーアの労働教育の実践を上のような立場から批判したことは，彼の労働教育思想が如何なるものであったことを示しているのであろうか。既にⅠにおいて触れたように，彼が児童労働の教育的意義を認識し，それを教育と積極的に結合しようとしたのは，ニュー・ラナークの「統治」を経て資本主義的生産関係を否定した共産主義的ユートピアとも言うべき理想社会を構想した『ラナーク州への報告』執筆以降のこと

であった。すなわち彼は当時の産業革命下にあっては児童をあの過酷な工場労働から解放することが，彼らの教育を可能ならしめるための第一条件であり，そしてそのようにして解放された条件の下でのみ子どもたちは真に集団的に成長しうると主張したのであった。ペスタロッチが貧困児童と共に苦闘し，彼らが家内工業的生産に従事することによって彼らの自立の道を見い出しうるとし，そしてまたそのような作業に教育的意義を見い出したことに対してオウエンが，それは「旧制度の原理」であり，「現実的にはほとんど効用がないもの」であると批判した[92] のもまさに上のようなオウエンの理解にもとづくものであった。しかしクルプスカヤが指摘したように[93] オウエンは単純に児童労働を否定したのではなかった。彼は『ラナーク州への報告』で明かにしたように，搾取の消滅した社会においては「職業教育が教育の重要な部分」[94]であることを主張し，労働と教育の結合によって育てられた子どもたちは「どんな最低位の人間でも昔の，あるいは現代の社会環境によって形成された最高級の最上等の人間よりもずっと上位な人間に高めてくれるところの立派な習慣，見識，行儀，性質を身につけた行動力と知識にみちた労働者階級」[95]へと成長するであろうことを明らかにしたのである。彼のニュー・ハーモニーにおける実験はこのような彼の理想を実現するためのものに他ならなかったのである。

しかしながらここで重要なことは，彼のこのような実験があくまで彼の資力によってうちたてられた社会のなかで行なわれたことと，彼がマクルーアの教育実践の中核を為す労働教育の実践をむしろ集団精神の欠如の視点から批判したこととの関係である。

しばしば指摘されるように，そして彼自らも言明するように，労働者の解放を目ざしたオウエンのエネルギッシュな活動を支えたものは，彼の労働者大衆に対する尽ることのない「慈愛の精神」[96]であった。そのことは英国のみならずヨーロッパの支配階級の人々の賛辞を獲得したニュー・ラナークの実践も，そしてまた更にそれを徹底させようとしたニュー・ハーモニーの実験も，それらがいずれも労働者階級の主体的な努力によって獲得されたのではなく，どこまでも彼の資力に基いて行われたものであったことによって明かであろう。従って，労働者階級の不断の闘いによるそのような理想社会の実現に思い及ばなかったオウエンが，この理想社会の維持のために目ざしたものは何よりも人道主義的な，相互協調の集団精神の涵養でなければならなかった。ニュー・ラナークにおいて彼が村民の協調を説き，そして幼児学校 (Infant School) においては「仲間を幸福にすること」を最大のモットーとしたのも，まさにこのようなオウエンの理想を反映したものと見ることができるのである。それはまた，私有財産の完全な廃止を掲げたニュー・ハーモニーにおいてもそれが労働者自身の要求と闘いによって獲得され，無限に発展されるべき社会としてではなく，静的な社会としてとらえられていたが故に，彼の目ざすべき理想は本質的に博愛主義を基調とした村民の人道主義的集団精神の涵養に他ならなかったのである。

オウエンがマクルーアの労働教育の実践を集団精神の欠如の視点から批判したことは，このような彼の社会観から導かれたものと考えることができるのである。そして更に，彼がマクルーアによる労働と教育の結合を批判するに当ってそのような立場による他なかったのも，上のような彼の社会観に規定されたことによると見ることができるのである。すなわち先にも指摘したように，オウエンはペスタロッチの労働教育の前近代的限界を正しく把握し，教育において幼少児童が苦役としての労働から解放されることの重要性を主張したにも拘らず，ニュー・ハーモニーにおける労働と教育のあり方についてはマクルーアに任せざるを得なかったのは，彼自身労働と教育の結合が労働者階級の解放にとって如何なる意味を有するかを科学的にとらえ切っていないことを示すものに他ならない。確かに彼が労働と教育の本質的結合は資本主義的生産関係の廃絶された社会においてのみ可能であると指摘したことは正当である。しかしこの両者の結合は，オウエンの主張したように，彼の構想した理想社会において始めて意味を持ちうるのではなく，まさに労働から疎外された労働者階級自身の自覚的要求として捉えられ，その実現に向って不断に追求されなければならないものなのであろう。すなわちオウエンにあっては労働者階級の解放のための労働と教育の結合という側面が捉えられることに薄弱であった点がくりかえし指摘されるべきであろう。

オウエンは徹底した博愛主義の立場に立つことによってこのような理解に達しえず，それがためにまた，彼は労働と教育の結合を超階級的に確保したユートピアにおいて即時的に実践しようとしたのである。従ってオウエンにとっての生産労働と教育の結合の実践的意義は，労働者階級の解放のための必須のものとして自覚されたというよりはむしろ，人道主義的集団精神の涵養のための重要な手段として位置づけられていたと考えられるのである。

＜注＞

(1) オウエンに対して戦後の日本教育界が注目したのは偶然

ではないであろう。オウエンが革新の思想家であったことは極めて一般的な理由であるが，いっそう具体的には，戦後の新教育運動の中で著しい影響を見せたコア・カリキュラム運動が，消費的生活との結合に傾斜し，生産労働との結合が稀薄であったという批判との関連を考えることができるであろう。

(2) 芝野庄太郎『ロバート・オーエンの教育思想』p.324，御茶の水書房 1961

(3) 柳久雄『生活と労働の教育思想史』p.187，御茶の水書房 1962

(4) 梅根悟『西洋教育思想史』第3巻 p.239 誠文堂新光社 昭和44年

(5) 五島茂氏によればオウエンの生涯は思想的発展の見地から次の5つに区分されるという(五島茂『ロバアト・オウエン著作史』昭和7年参照)

第1期 オウエニズムの生成 (1771～1814)
第2期 オウニズムの発展 (1814～1824)
第3期 空想的コミュニズムの展開 (1825～1828)
第4期 無産階級オウエニズム (1829～Sept. 1834)
第5期 オウエニズムの方向転換 (Oct. 1834～1858)

(6) 五島茂『ロバアト・オウエン著作史』p.151

(7) R. Owen, The Life of Robert Owen written by himself. 1857

(8) R. Owen, On the Employment of Children in Manufactors. 1818

(9) F. エンゲルス『反デューリング論』岩波文庫(下) p.192

(10) R. Owen, Report to the County of Lanark. 1821 渡辺義晴訳『社会変革と教育』p.161 明治図書

(11) 永井義雄『イギリス急進主義の研究』p.247 御茶の水書房 1962

(12) G.D.H. Cole は，彼の編集する R. Owen. A New View of Society and Other Writings. の序文の中で次のように述べている。「オウエンはこれらの8年間 (1813～1820) のうちに人類の知識に本質的に貢献した」(p. VII). 「オウエンの後半の著作は初期のもののくりかえしにすぎない」 (p. XVII)

(13) オウエンがこの演説において否定したものは既存宗教であり，宗教そのものの存在を否定したのではなかった。このことはニュー・ハーモニーの実験の失敗後，急速に心霊主義 (spiritualism)に傾斜して行った問題を考えるうえで充分に注意されておくべきである。

(14) F. Podmore, Robert Owen a Biography. vol. 1. pp.156-7, 1906

(15) R. Dale Owen, Threading My Way. p.239. 1874. 但し引用頁は1967年のリプリント版による。なお，G.ラップ派の村はオウエンが買収したハーモニー協同村に至るまで数次にわたる移転があった。F. Podmore, ibid. p.285

(16) F. Podmore, ibid. pp.285-6

(17) 越村信三郎「ロバアト・オウエンの夢と現実」ロバアト・オウエン協会編『ロバアト・オウエン論集』所収 p.106. 家の光協会，昭和46年

(18) A. Bestor, Backwoods Utopias. The Sectarian Origins and the Owenite Phase of Communitarian Socialism in America, 1663-1829. p.48

(19) A. Bestor, ibid. p. 107

(20) F. Podmore, ibid. p.289

(21) A. Bestor, ibid. pp.109-110

(22) F. Podmore, ibid. p.291

(23) F. Podmore, ibid. p.291

(24) The New Harmony Gazette Vol. 1. No. 1. 1825.10月1日 尚本引用の訳文と要約は五島茂氏の『著作史』に負った。

(25) The Constitution of the Preliminary Society. The New Harmony Gazette. Vol. 1. No.1. p.2

(26) A. Bestor, ibid. p. 119

(27) G.B. Lockwood, The New Harmony Movement. 1905 p. 101. Lockwood によれば1825年のクリスマスには入村者は1,000人に達していた。

(28) F. Podmore, ibid. pp.295-7

(29) A. Bestor, ibid. p.160

(30) F. Podmore, ibid.p.300

(31) A. Bestor, ibid. p.133

(32) R. Dale Owen, ibid. p.285. F. Podmore, ibid. p.300

(33) G.B. Lockwood, ibid. p.101

(34) 五島茂『前掲書』p.132

(35) R. Dale Owen, ibid. p.285

(36) 五島茂『前掲書』p.133

(37) The Constitution of the New Harmony Community of Equality. The New Harmony Gazette· Vol.1. No. 21. 1826年2月 尚本稿に引用した部分のうち，特に第1条から第15条までの条文の要約は五島茂氏に負っている。但し訳文は必ずしも氏のものによらない。

(38) F. Podmore, ibid. pp.302-3

(39) A. Bestor, ibid. p.123

(40) A. Bestor, ibid. p.175

(41) G.B. Lockwood, ibid. p.113

(42) A. Bestor, ibid. p.182

(43) A. Bestor, ibid. p.191

(44) A. Bestor, ibid. p.185

(45) A. Bestor, ibid. pp.186-188

(46) A. Bestor, ibid. p.189

(47) G.B. Lockwood, ibid. p.251. しかしこのマクルーアの提案は最終的に否決された。

(48) G.B. Lockwooe, ibid. p.251

(49) A. Bestor, ibid. p.199

(50) この記事が無署名であるにも拘らず R.D.オウエンと W.オウエンの2人の筆になることは，R.D.オウエンが後に彼の自伝の中で記している. R.D.Owen, Threadeng My Way. pp.288-289

(51) 五島茂『前掲書』p.137

(52) The New Harmony Gazette. Vol. 2. G.B. Lockwood ibid. cit. pp.166-72. 但し本稿の要約は五島茂『前掲書』pp. 157-8 に負った。

(53) ニュー・ハーモニーにおけるオウエンの教育的活動を考察したものは，わが国のみならず諸外国の教育界でも少数である。K.H.ギュンター，ア・イエ・ピスクノフ，オ・エヌ，ジケーエワ等の考察はそのような意味で貴重ではあるが，しかし，ニュー・ハーモニー平等村の建設プロセスに即して考察する視点が欠落しているようである。
K.H. Günther, Geschichte der Erziehung. ss.307-308.1969
ア・イエ・ピスクノフ，武田晃二訳「ロバアト・オウエンの学説における教育の諸問題」
オ・エヌ・ジケーエワ，武田晃二訳「ロバアト・オウエンの共産コロニーにおける労働教育」
ピスクノフ，ジケーエワ論文は北大教育学部教育史研究室資料1971所収

(54) The New Harmony Gazette. Vol.1. No.1. p.3

(55) A. Bestor, ibid. p.168

(56) The New Harmony Gazetts. Vol. 1. No.3. p.22

(57) F. Podmore, ibid. p.312. R.D. Owen, ibid. p.260

しかしこれは，Podmore も指摘するようにオウエンの資金提供によってまかなわれた。

(58) The New Harmony Gazette. Vol. 1. No. 1-4

(59) G.B. ロックウッドはオウエンとマクルーアの思想の共通点のひとつとして博愛主義的思想をあげているが，それは以下において明かになるようにオウエンの博愛主義とは質を異にしているといわなければならないであろう。
G.B. Lockwood, ibid.p.233

(60) 以下，マクルーアの経歴については J.F.C. Harrison, Robert Owen and the Owenites in Britain and America. The Quest for the New Moral World. 1969. pp.37-39

(61) A. Bestor, ibid. p.149

(62) A. Bestor, ibid. p.149

(63) Education and Reform at New Harmony. Correspodence of William Maclure and Marie Duclos Fretageot 1820-1833. edited by A. Bestor. 1948. p.320

(64) A. Bestor, ibid. p.149

(65) A. Bestor, ibid. p.149

(66) A. Bestor, ibid. p.149

(67) A. Bestor, ibid. p.150

(68) A. Bestor, ibid. p.150

(69) F. Podmore, ibid. p.299

(70) W. Maclure, Opinions on Various Subjects. 1828
J.F.C. Harrison, Utopianism and Education. Robert Owen and the Owenitis. 1968 所収 p.248

(71) Education and Reform at New Harmony. Correspondence of William Maclure and Marie Duclos Fretageot 1820-1833. p.301

(72) Ibid. p.307

(73) Ibid. P.309

(74) R.F. Butts, L.A. Cremin, A History of Education in American Culture. 1952. p.219

(75) G.B. Lockwood, ibid. p.236

(76) G.B. Lockwood, ibid. p.238

(77) G.B. Lookwood, ibid. p.239

(78) G.B. Lockwood, ibid. pp.241-243
ニュー・ハーモニーにおける教育の実態については K. H. Günther. etal, Geschichte der Erziehung. 1969においてもその究明が行われているが，それはニュー・ハーモニーのどの時期を具体的に指し，何を典拠としているのかが明かでない。例えば年齢，カリキュラム等については次のように示されている。
〔出生から1歳半まで〕
母親による教育，強制の排除，児童の身体の世話，主要な活動としての遊び
〔1歳半から3歳まで〕
幼児学校における集団教育の開始，悪環境からの疎隔，身体鍛錬のための遊び
〔3歳から8歳まで〕
9時間授業の開始(読み，書きなしの口頭教授のみ) 博物，地理の直観教授，農業，家政，園芸の労働教育，音楽，ダンス，軍事訓練
〔8歳から12歳まで〕
読・書・算の開始，植物，動物，鉱物，化学，製図，地学，読本による歴史，手工の習得，軍事訓練
〔12歳から16歳まで〕
天文学，国民経済，数学，心理学，国家及び共同村行政理論，選択によるより高度な自然科学分野と1カ国の外国語，技芸及び工芸の実習。尚 K.H. Günther, Robert Owen Pädagogische Schriften. 1955 にも上と同様の指摘がなされている。SS.35-42

(79) G.B. Lockwood, ibid. p.244

(80) Education and Reform at New Harmony. p.331

(81) F. Podmore, ibid. pp.314-315

(82) G.B. Lockwood, ibid. pp.245-6

(83) R.D. Owen, ibid. p.277

(84) The New Harmony Gazette. Vol.1. p.390

(85) Education and Reform at New Harmony. p.378

(86) Education and Reform at New Harmcny. p.379

(87) G.B. Lockwood, ibid. pp.252-3

(88) R. Owen. 楊井訳『新社会観』p.80 岩波文庫

(89) F. Podmore, ibid. p.313

(90) R. Owen. 楊井訳『前掲書』p.84

(91) Education and Reform at New Harmony. p.331

(92) R. Owen, The Life of R. Owen written by himself· 1857. 五島茂訳『オウエン自叙伝』p.310 岩波文庫

(93) クループスカヤ，勝田昌二訳『国民教育と民主主義』p.72

(94) R. Owen, Report to the County of Lanark. 1820 渡辺義晴訳『社会変革と教育』p.159

(95) R. Owen, ibid. 渡辺訳 p.161

(96) R. Owen. 五島訳『オウエン自叙伝』p.64